

認知症とともによりよく生きるための実践知の言語化

A Pattern Language for Living Well with Dementia

井庭 崇[†], 岡田 誠[‡] 金子 智紀[†], 田中 克明^{*}

Takashi Iba, Makoto Okada, Tomoki Kaneko, Katsuaki Tanaka

[†]慶應義塾大学, [‡]株式会社富士通研究所, ^{*}コクヨS&T株式会社
Keio University, Fujitsu Laboratories Ltd., KOKUYO S&T Co., Ltd.
journey@sfc.keio.ac.jp

Abstract

In this paper, we present a pattern language for living well with dementia, which we call “Words for a Journey.” This pattern language consists of 40 patterns, which is categorized into three: the cared, the caring, and everyone. These patterns have been constructed as the result of interviews with dementia patients, their families, and people who support the cause. This paper overviews the pattern language and describing its development process. Then, evaluative feedback from readers is presented.

Keywords — Pattern Language, Dementia, Design, Quality of Life

1. はじめに

日本の 65 歳以上の方のうち、軽度の認知障害を持つ人までを含めれば、その数は 800 万人を越えると推定されている。これは、65 歳以上の約 4 人に 1 人、日本人全体でみると約 15 人に 1 人という計算になる。また、2025 年には日本の人口の 25%が 75 歳以上の超高齢化社会となり、介護・医療のバランスが崩れることが懸念されている。

認知症と診断を受けると、今の生活や描いていた未来像をそのまま成り立たせることができなくなるかもしれないと感じ、そのことを受け入れられないことは多い。とくに認知症と向き合うのが初めての場合には、これからどうなるのかわからないという不安に押しつぶされそうになり、また、これまでに介護の経験がある場合には、そのときの記憶がよみがえってしまう。ところが、認知症と診断された直後は、まだこ

れまでと同様の生活を続けることも多く、その段階での支援はまだまだである。

他方、認知症であっても認知症とともによりよく生きている人、あるいは生きようとしている人たちもいる [1][2][3][4][5]。その人たちは、認知症の負の部分だけにとらわれておらず、認知症であるからといって「すべてを諦めなくてはならない」と考えてはいない。このような方々がどのような発想でどのような工夫によって、そのような前向きに、認知症とともに生きているのかを共有することができれば、広く多くの方の支援になるのではないかと。本研究はこのような問題意識で始まった。

本研究は、認知症とともによりよく生きることを実践する工夫をまとめたパターン・ランゲージである。認知症であっても前向きに生きている方々からお話を伺い、「認知症とともによりよく生きる」ための工夫を探り、記述した。より具体的に言うと、認知症を抱える本人や家族、そして周囲の人たちが、それぞれの「状況」において抱えがちな「問題」がどのようなものであり、それをどのように「解決」することができるのか、ということをもとめている。このような工夫を知ること、他の人も自分が直面している問題を解決したり、これから直面するかもしれない問題を事前に回避したりすることができるようになる。

本論文では、パターン・ランゲージの方法について概観したのち、「認知症とともによりよく生きる」ためのパターン・ランゲージである『旅のこぼれ』 [6][7]を取り上げる。そして、その作

成プロセスについて論じたのち、読者からのフィードバックを紹介する。

2. パターン・ランゲージ

パターン・ランゲージは、建築家クリストファー・アレグザンダーが提唱した知識記述の方法である。アレグザンダーは、町や建物に繰り返し現れる関係性を「パターン」と呼び、それを「ランゲージ」（言語）として共有する方法を考案した[8][9]。彼が目指したのは、誰もがデザインのプロセスに参加できる方法である。

その後、ある「状況」で生じる「問題」をどのように「解決」すればよいのかという実践的な知を記述するパターン・ランゲージの方法は、ソフトウェア開発[10]や、教育[11]や組織変革[12]などの創造活動一般を支援する方法として広がってきた。

私もこれまで、創造的な学びのための「ラーニング・パターン」[13]、創造的プレゼンテーションのための「プレゼンテーション・パターン」[14][15]、創造的コラボレーションのための「コラボレーション・パターン」[16]、防災の「サバイバル・ランゲージ」、社会変革のための「チェンジメイキング・パターン」などを作成してきた。そして、これらの人間行為のパターン・ランゲージを「パターン・ランゲージ 3.0」と名づけ、その特徴についても研究してきた[17][18]。

パターン・ランゲージでは、デザインにおける経験則を「パターン」という小さな単位にまとめる。各パターンには、ある「状況」(Context)において生じる「問題」(Problem)と、その「解決」(Solution)の方法がセットになって記述され、それに「名前」(パターン名)がつけられる。このようなパターンを共有することで、そのような経験則をもっていなかった人も、その視点や発想を踏まえて考えたり、コミュニケーションを図ったりすることが可能になる。

アレグザンダーがパターン・ランゲージで目指したのは、単なる経験則の共有のためではな

かった。彼は、古きよき町や建物がもっているような調和のとれた美しい「質」を、これからつくる町や建物においても実現するにはどうしたらよいかを考えて、パターン・ランゲージの方法を考え出したのである[9]。人々がくつろぎを感じる美しい町や建物を調べた結果、それらは徐々に形成・修正され、形づくられてきたということに気づいた。それらはどれも、誰かひとりの綿密な計画のもとにつくられたものではなく、長い時間をかけて自然に成長してきたという経緯をもっている。

こうして彼は、町や建物はそこに住む人たちによって徐々に形成されていくべきものであるという考えに至る。住民たちが町や建物の状態を「診断」し、必要があれば「修復」しながら育てていく、そういう方法でつくられるべきだというわけである[19]。このような問題意識のもと、よい質をもつものをつくるデザイン・プロセスの支援方法として、パターン・ランゲージは提案されたのである。

本研究では、本人や家族が自分たちで自分たちの状況に合わせて「認知症とともによりよく生きる」生活・人生をデザインすることを支援するために、パターン・ランゲージの方法を採用した。ここで目指されているのは、よりよい「生活の質」(QOL: Quality Of Life)である。本人の性格・経験や症状、家族との関係性などによって、具体的にはどのような生活・人生にするのがよいのかは異なっている。それゆえ、本人や家族が、自らの生活・人生を「診断」し、よりよくなるように「修復」していく。そのことを支援することが、本論文で紹介するパターン・ランゲージ「旅のことは」が目指すところである。以下、「旅のことは」の構成と内容、そして、その作成プロセスについて見ていくことにしたい。

3. 認知症とともによりよく生きるためのパターン・ランゲージ「旅のことは」

本研究で作成した「認知症とともによりよく

生きる」パターン・ランゲージである『旅のことば』では、全体を統括する考え方である「新しい旅」(図1)のもと、[本人]の旅のことば(図2)、[家族]の旅のことば(図3)、[みんな]の旅のことば(図4)という、視点の違う3つのグループに分かれて記述されている。それぞれのグループには、その立場において抱えがちな問題とその解決のための工夫がまとめられている。まずは自分の立場のものから読みはじめることが想定されているが、他のグループの「旅のことば」を読んでみることで、それぞれの立場で抱える問題や、それを解決した先にある前向きな未来を垣間みることができるようになっている。

1 新しい旅



図1 「旅のことば」のコア・パターン

2 旅への一歩



3 出発のあいさつ



4 旅の計画



5 旅の仲間



6 できることリスト



7 自分の日課



8 自分をあらわす部屋



9 なじみの居場所



10 よい先輩との出会い



11 流れを変える



12 今を楽しむ



13 自己紹介グッズ



14 自分なりの表現



15 ことばのギフト



図2 本人のためのパターン

16 ともに歩む



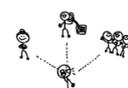
17 チームリーダー



18 わが家専門家



19 三種のつながり



20 さりげない告白



21 活躍の機会



22 夢への準備



23 おもしろ化



24 いつものおしゃべり



25 見えている世界



26 自分の時間



27 切り替えの工夫



28 悩みのつぶやき



29 特別な日



30 いろんな世代



31 わくわく実行委員会



32 小さな気づき



図3 家族のためのパターン

33 自分の仕事から



34 その場の助っ人



35 見守りサポーター



36 個人的なつきあい



37 ないまぜのイベント



38 仕事をつくる



39 声を届ける



40 ウォーム・デザイン



図4 みんなのためのパターン

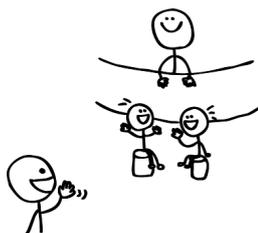
これら 40 個のパターンはそれぞれ、どのような「状況」でどのような「問題」が生じやすく、それをどう「解決」すればよいのか、そしてその「結果」どうなるのかという、ひとつの経験則（工夫）がまとめられており、それに名前（パターン名）がつけられている。

各パターンは、同じ形式で記述されている。パターン番号、パターン名、導入文、イラスト、状況、問題、解決、結果、関連パターンの順である。具体例として、以下に、本人のためのパターン「なじみの居場所」を引用する[6]。

No.9

なじみの居場所

家族も知っている外出先をつくる。



外に出るよりも家にいることが多くなりました。

▼そのとき

認知症だからといって、ずっと家のなかにいると気が滅入ってしまいます。同じ場所に居続けるのはストレスがたまりやすいものだからです。しかし、あちこち自由に出かけようとすると、家族が心配するかもしれません。もしかしたら出先で状況がわからなくなり、困ってしまう可能性があるからです。

▼そこで

自分ひとりで行けて、家族も知っている行きつけの場所をつくります。すでにそのようなお気に入

りの場所があれば、そこを自分の《なじみの居場所》だと家族に伝えておきます。まだない場合には、家の近くの喫茶店や小さな美術館など、居心地のよさそうな場所を探すことから始めます。家族や友人と一緒に探すと安心です。よさそうな場所が見つかったら、その場にいる店員さんや常連さんたちに、ひとこと挨拶をしておくとも早くなじむことができるでしょう。

▼そうすると

家のほかに居心地のよい場所があることで、豊かな時間を過ごすことができます。ほかの人とともにする時間も増えるでしょう。家族にとっても、いつもの《なじみの居場所》にいるとわかっていることが安心です。万が一、認知症の症状が出て困ったとしても、なじみの店員さんや常連さんがいれば、状況を理解して対応してくれるでしょう。

- ▷ 12.今を楽しむ
- ▷ 34.その場の助っ人
- ▷ 36.個人的なつきあい

4. パターン・ランゲージ「旅のことば」の作成プロセス

ここからは、認知症とともによりよく生きるためのパターン・ランゲージ「旅のことば」の作成プロセスについて紹介する。

4.1 マイニング・インタビュー

「旅のことば」は、認知症であっても前向きに生きているご本人や家族の方へのインタビューにもとづいて作成された。インタビューは、パターン・ランゲージを作成するための特殊なインタビュー方法である「マイニング・インタビュー」[20]によって行った。

そこでは、まず「認知症とともによりよく生きる」ためには何が大切だと思うか、そして、これから認知症とともに生きることになる後輩たちに、どうするとよいと伝えたいか、ということをお話

てもら。そして、それがなぜ大切なのかという理由を聞き、さらにどのようなときに大切になるのか、ということ聞いていく。これにより、パターンを作成するために必要となる情報を、解決→問題→状況という順で聞き出すことができる。

このような方法で、1～3人の対象者に対して約2名のインタビュアーで、約3時間のインタビューを行った(図5)。語られた内容は、工夫・秘訣については黄色の付箋に、悩み・問題については青色の付箋にその場で書き込まれた。インタビューの結果、合計で、工夫・秘訣については251個、悩み・問題については125個得た(表1)。

また、メンバーがこれまでに知っていた工夫や、文献のなかで紹介されている事例や工夫も付箋として追加された。



図5 マイニング・インタビューの様相

表1 マイニング・インタビューの結果

対象者	種別	工夫・秘訣	悩み・問題	合計
A	家族	36	6	42
B	家族	31	24	55
C	家族	45	17	62
D	本人&家族	25	24	49
E1, E2	本人, 家族	42	21	63
F1, F2	本人, 家族	17	11	28
G1, G2, G3	家族, 家族, 家族	55	22	77
合計		251	125	376

4.2 エレメント・クラスタリング

インタビューで得られた付箋は、KJ法[21]によって、内容が近いものどうしを近づけながら、グルーピングしていく(図6)。個々の付箋はあくまでも一個人・一家庭の工夫・秘訣にすぎないかもしれないが、他の人が語った内容にも似ているものがあれば、それらをグルーピングすることで、共通パターンを見出すことができる。このように、マイニング・インタビューで得られたデータ(付箋に書かれたもの)に寄り添い、その意味を探究しながら、グループをつくっていく[22]。

この過程で、付箋のレベルではばらばらだった粒度や抽象度が、グループレベルでは揃うようになるので、パターンの粒度や抽象度に統一感が生まれることになる。



図6 エレメント・クラスタリングの様相

4.3 シード・メイキング

エレメント・クラスタリングで付箋のグループができたら、そのグループが、のちにパターンになる候補となる。次に行うのは、これらのグループの付箋の内容を踏まえ、そのグループの本質を「状況」「問題」「解決」の形式でまとめるということである。このようにして書かれたものは、まだすべての項目は書かれておらず「パターン」とは言い難いので、「パターンの種」と呼んでいる。

そして、「パターンの種」をすべて書いたら、それらを並べ、「パターンの種」の関係性を考えながら、全体を把握する（図7）。ここで、内容の偏りや各パターンが担うべき内容の確認などを行う。



図7 「パターンの種」の全体の把握の様様

4.4 パターン・ライティング

「パターンの種」ができあがり、全体像も把握できたら、次はそれらをパターンの形式で書くという段階に入る。ここで書くのは、パターン番号とパターン・イラストを除いた、パターン名、導入文、状況、問題、解決、結果である。それぞれのメンバーが担当するパターンを書いてきて、それをプロジェクト・メンバー全員で「パターン・レビュー」を行い、改善点を話し合っていく（図8）。

レビューの際には、そこで書かれていることは、「パターンの種」で言おうとしていたことと同じかどうか、ひいてはインタビューの際に語られた内容やニュアンスと合っているかどうか、そして、ことばの表現がその内容を表すのに適しているかを中心に見ていく。レビュー後は、そこでのコメントを踏まえ、文章を書き直してくる。これを何度もまわす。もともと暗黙的な経験則を言語化しようとしているため、端的にうまく説明することは難しく、この段階のレビューと修正が全行程のなかでも最も時間を要するものとなっている。



図8 パターン・レビューの様様

4.5 パターン・イラストレーティング

パターンの文章がある程度できてきたところで、パターン・イラストを描く作業が始まる。パターン・イラストは、単なる挿絵ではなく、そのパターンの内容を視覚的に表す重要な「表現」である。パターン・イラストの作成では、まずパターンの文章を手がかりにそのパターンの本質をつかみ、キャラクターの状況と動作で表現していく[23][24]。パターンの文章同様、イラストについても、ラフスケッチの段階でも仕上げの段階でも、他のメンバーを交えたレビューが行う（図9）。





図9 イラスト作成とレビューの様様

4.6 パターンの仕上げ

パターンの文章のライティングとリバイズは、チームメンバーで分担して行うが、最後には、プロジェクトのディレクター（監督）がすべての文章に手を入れ、仕上げを行う。これは、パターン同士の整合性をとるとともに、言葉遣いや質感を統一するためにも重要となる。今回仕上げを担当したのは、井庭崇である。

今回のパターン・ランゲージは、認知症と向き合うということになるため、文章の表現には十分注意した。また、認知症のご本人が家族のパターンを読むことも想定されているため、家族向けに書かれた「問題」の記述が、ご本人を傷つけたり不快な気持ちになったりしないように、細心の注意を払った。文章の語尾は「です・ます」調にし、言葉遣いも、やらかくなるように努めた。

4.7 本のデザイン

パターン・ランゲージは、本のかたちで読者に届けられる。そのため、そのメディアとなる本のデザインも重要となる。本プロジェクトでは、ページ・レイアウトや表紙のデザインも、すべて自分たちで行っている（図10）。

レイアウトにおいては、高齢の方が読むことを想定して大きな文字にし、フォントも読みやすさを重視した。また余白を十分にとり、パターン名やイラストが印象的に目につきやすいようにした。

表紙は、前向きな気持ちになれるような明るいデザインになるように心がけた。デザイン・オブジェクトとしては、内容を連想しやすくするため

に、パターン・イラストのキャラクターをいろいろな表情で配置した（図11）。しかし、あまり子どもじみたものにならないように、原色ではなく淡くやさしい色づかいとした。まさに、本パターン・ランゲージの最後のパターンである「ウォーム・デザイン」の実践である。

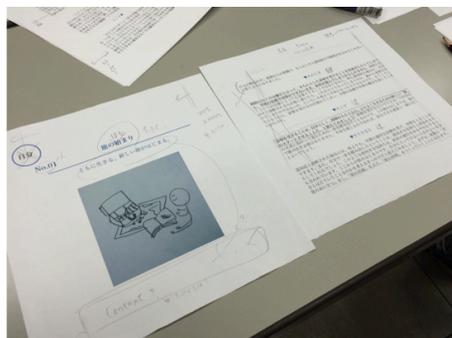


図10 本のデザインの模様



図11 表紙のデザイン（日本語版と英語版）

5. フィードバックの分析

以上のようなプロセスで作成したパターン・ランゲージ「旅のことば」は、2014年11月に冊子版が作成され、東京で行われたG8認知症サミット後継イベントやSFC Open Research Forumなどで限定的に配布された。そのときに冊子を手した読者からのフィードバックを紹介することにしたい。以下は、20代～50代の26名から得たフィードバック（総計約19,000字）から一部抜

粹したものである。

まず、「旅のことば」を読んでみた感想については、以下のようなものがあった。

- “本人や家族にとって、一番役に立つのは、同じ苦しみを味わった仲間です。「旅のことば」は、まるでそんな仲間から優しく語りかけられているようなあたたかさ、心地よさ、安心感、信頼感、そして希望を感じます。心の一番奥にすっと入って、おさまります。”
- “薄いパンフレット版も作って診断を受けた方とその家族全員に病院で渡したいです。医師から絶望だけを与えられて帰宅するの方が圧倒的に多いと思いますから。”
- “私は、ブログを通してここ数年、介護家族から多数の相談を受けてきたのですが、考え方（視点、捉え方）を変えない限り、苦境から抜け出すことはできないのだということを年々強く実感していました。当事者としては、「認知症になったら終わり」という「常識」が、事実とは異なるということに気づかない限り、前向きな気持ちには決してなれません。家族も認知症観を変えない限り、そして本人の立場になって考えるという視点を持たない限り、状況の悪化から抜け出すことはできません。
しかし医師も介護のプロも認知症の本当の姿を理解している方は、ほとんどいないと何十冊の認知症関連本やネットの記事を読んで、また多数の方の体験談を伺って（それを記事にして）、思うようになりました。彼らの書いた本やアドバイスを読んでも本人や介護家族は、救われないのです。彼らの言葉は、心の奥にまで届かずに消えていってしまいません。
「旅のことば」は、その問題をひらりと越えています。”
- 現在出向いている認知症外来の院長にも「旅のことば」を紹介し、内容や構成についてとても評価しておりました。専門書としてではなく家族コミュニケーションの種として、パーソンセンタードなその人らしいコミュニケーションを育むツールとして、その価値を感じていました。

介護する家族の立場からは、以下のような感想があった。

- “以前（5年前まで）わたしも認知症の父と母を介護した経験から、この本に書かれていることが介護の現場での介護者のヒントになっていると思います。家族にとっては認知症の家族を介護することは初めてのことが多く、家庭内のことなのでなかなかほかからアドバイスを受ける事ができません。外部から派遣されるヘルパーさんや看護師から教えてもらうことぐらいですが、このようなヒントがあれば、介護を前向きにできるとおもいます。”
- “特に介護は、共感する仲間と介護者から離れて楽しむ切り替えが、長く続けていくキープポイントだと感じてきました。ともすれば家族間の介護では、「介護している家族が遊ぶこと・楽しむことに罪悪感を持ってしまう傾向」がありますが、「ワクワク実行委員会」や「特別な日」、「見守りサポーター」を上手に使って、これから年をとっていきときに充実させて生きていきたいと思います。”

パターンの表現については、パターン・ランゲージの特長やパターンの形式について、以下のような感想があった。

- “「そこで」から「そうすると」と優しい言葉でつながっていくときに、やすらぎと共感を感じました。「そうそう、そうだわ！そうしてみよう！」って変わっていきけるのです。とても素敵な、小川のせせらぎのような流れだと思います。”
- “状況ごとに描かれていて、想像しやすい。その場面になったときに思い出しやすい。”
- “近所に心配な人が居るから何をすれば良いかすぐ知りたいという人（小さいパターンに関心がある人）など、様々な人がいます。また、マニュアルのような堅苦しいものは敬遠する人もいます。この時、自分の関心のあるところからページを開けるパターンランゲージはとても有効だと感じました。”
- “この本を読む人の立場と緊急性により、どこから読むかをお勧めしているのは良いと思います。”

また、文章やイラスト、レイアウト、表紙のデザ

インについても、次のような感想があった。

- “平易に記述されており、分かりやすく、また、かわいいイラストで、ともすれば暗くなりがちなのテーマが明るく前向きにとらえやすくなっていると感じました。”
- “内容は、非常に高度なのに、どうしたらここまで柔らかい文章にすることができるとか大変驚いています。とてつもなく難しいことですから。”
- “この本の印象はアイボリーの紙に黒い文字のツートンで、色や挿絵に惑わされることなく読むことができました。活字の大きさも良かったです。言葉遣いが優しく、誰にでも読みやすくわかりやすいと思いました。”
- “感想は、とてもわかりやすく、挿絵もとても温かみがあり、認知症を新しい旅と捉えるのに、何の違和感もなくすぐに解けこむことができると皆さん絶賛しております。”
- “イラストがいいですね。認知症の母親と話すときに意識しているのは、1) 笑顔、2) 受け入れ、3) あなたの話に興味があるという意思表示です。いずれもことば以外の表現が重要だと思っています。色調、紙質、デザインと相まって、この本の性格が表現されてますね。”

介護の現場の方からは、次のような感想があった。

- No13「自己紹介グッズ」を利用者さんと作ったら楽しそう。No.6「できることリスト」はケアの現場でもすぐ取り入れられて良い。できないことばかりに目が向きがちなのが多いので、発想の転換をしてもらうにもわかりやすく方向性をシェアできる。グループホームに最近入居された利用者さん(まだ軽度で、自身が認知症ということも理解している方。また認知症との付き合い方もうまくされているような気がする方)と一緒に読んでみたいと思った。
- “普通の人”にその気になってもらうためには、ある程度具体的なやり方の説明や取組例を示すことが有効です。ただし、問題は始めてから出てくるものが多く、やらされた感があるとモチベーションもすぐに下がってしまうため、それをその通り真似す

るだけでは絶対にうまくいきません。生きた活動の立ち上げを後押しするためには、自分達で考える癖をつけてもらう必要があります。

この時、自分が気になるパターン／自分達の地域の課題に該当するパターンからスタートして、そこから残りのパターンを選ぶという作業が有効なのではないかと感じました。考える手がかりが何もない人にとっては特に有効なツールになり得ると思います。

いま認知症に関わりがない人からは、次のような感想があった。

- 漠然とした認知症への怖いイメージが、この本を読むことで和らぐのではと感じました。シンプルだけど温かみのある絵やパターンのある表現がとってもわかりやすく、誰にでもおこりうる認知症に対しての心構えにとっても役立つと思います。
- やはり当事者になるイメージは、なかなか持てないと思いますが、「家族」になるイメージは誰もが覚悟しておく必要のあることなので、まずは「家族の旅のことばは、自分事化するのに最適なパートでした。そして「みんな」の旅のことばは、企業としてできることを考えるヒントがたくさん詰まっております。参考にさせていただきます。最後になりますが、いずれ自分も、という意味で「本人」のことばは大切に読んでおくべきパートだと感じました。知っていることはとても心強いことから。

6. おわりに

本論文では、認知症とともによりよく生きるためのパターン・ランゲージである「旅のことば」について紹介してきた。「旅のことば」は2015年5月に書籍[6][7]として出版されたのち、同年6月には、そのカード版も発売された（「旅のことばカード」、クリエイティブシフト社）。

現在、これらの書籍やカードを用いたワークショップを開始している。現在行っているワークショップには、パターンをきっかけとして経験談を語り合う対話ワークショップと、パターンを発想

の種として新しい商品やサービスを考えたり、支援・介護方法について考えたりするアイデア・ジェネレーション・ワークショップがある。このような活用方法の開発と実践については、これから、現場の方とともにさらに取り組んでいきたい。

参考文献

- [1] Bryden, C. (2005) *Dancing with dementia*, Jessica Kingsley Publishers, London.
- [2] Bryden, C. (2012) *Who will I be when I die?*, Jessica Kingsley Publishers, London.
- [3] 太田正博, 太田さんサポーターズ, (2007) 『マイウェイ：認知症と明るく生きる「私の方法」』, 小学館
- [4] 中村 成信, (2011) 『ぼくが前を向いて歩く理由：事件、ピック病を抱えて、いまを生きる』, 中央法規出版
- [5] 佐藤 雅彦, (2014) 『認知症になった私が伝えたいこと』, 大月書店
- [6] 井庭 崇, 岡田 誠 (編著), 慶應義塾大学 井庭崇研究室, 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ, (2015) 『旅のことば：認知症とともによりよく生きるためのヒント』, 丸善出版
- [7] Iba, T., Okada, M., Iba Lab., and DFJI (Dementia Friendly Japan Initiative) (2015), *Words for a Journey: The Art of Being with Dementia*, CreativeShift Lab.
- [8] Alexander, C., Ishikawa, S., Silverstein, M., Jacobson, M., Fiksdahl-King, I. and Angel, S. (1977) *A Pattern Language: Towns, Buildings, Construction*, Oxford University Press.
- [9] Alexander, C. (1979) *The Timeless Way of Building*, Oxford University Press.
- [10] Beck, K. and Cunningham, W. (1987) 'Using pattern languages for object-oriented programs', *OOPSLA-87 Workshop on the Specification and Design for Object-Oriented Programming*.
- [11] Pedagogical Patterns Editorial Board (2012) *Pedagogical Patterns: Advice for Educators*, Createspace, San Bernardino, CA.
- [12] Manns, M.L. and Rising, L. (2005) *Fearless Change: Patterns for Introducing New Ideas*, Addison-Wesley, Boston.
- [13] Iba, T., Iba Lab. (2014) *Learning Patterns: A Pattern Language for Creative Learning*, CreativeShift Lab.
- [14] Iba, T., Iba Lab. (2014) *Presentation Patterns: A Pattern Language for Creative Presentations*, CreativeShift Lab.
- [15] 井庭崇, 井庭研究室 (2013), 『プレゼンテーション・パターン：創造を誘発する表現のヒント』, 慶應義塾大学出版会
- [16] Iba, T., Iba Lab.(2014) *Collaboration Patterns: A Pattern Language for Creative Collaborations*, CreativeShift Lab.
- [17] 井庭崇, (2011) “パターンランゲージ 3.0：新しい対象×新しい使い方×新しい作り方”, 情報処理, Vol.52, No.9, pp.1151-1156.
- [18] 井庭 崇 (編著), 中埜 博, 江渡 浩一郎, 中西 泰人, 竹中 平蔵, 羽生田 栄一, (2013) 『パターン・ランゲージ：創造的な未来をつくるための言語』, 慶應義塾大学出版会
- [19] Alexander, C., Davis, H., Martinez, J. and Corner, D. (1985) *The Production of Houses*, Oxford University Press.
- [20] Iba, T., and Yoder, J. (2014) “Mining Interview Patterns: Patterns for Effectively Obtaining Seeds of Patterns,” in *the 10th Latin American Conference on Pattern Languages of Programs (SugarLoafPLoP 2014)*, Brazil.
- [21] 川喜田 二郎, (1967) 『発想法：創造性開発のために』, 中央公論社
- [22] Iba,T. and Isaku, T. (2012) ”Holistic Pattern-Mining Patterns: A Pattern Language for Pattern Mining on a Holistic Approach,” in *the 19th Conference on Pattern Languages of Programs (PLoP2012)*, Arizona.
- [23] 原澤香織, 宮崎夏実, 櫻庭里嘉, 井庭崇 (2015) 『A TALE OF PATTERN ILLUSTRATING：パターンイラストの世界』, CreativeShift Lab.
- [24] Iba, T., Iba Lab. (2015) *Pattern Illustrating Patterns: A Pattern Language for Pattern Illustrating*, CreativeShift Lab.